

青摘み利用 ヒット商品



「湘南みかんぱん」は確かにミカンの味がする。ミカン果汁入りの餡だけでなく、果汁が練り込まれたパン生地もオレンジ色をしている。

この「みかんぱん」は、2015年の「全国逸品セレクション」で準グランプリを獲得した。商店や商店街の活力復活を目指すNPO法人「一店逸品運動協会」主催の全国コンテストだ。17年には、平塚市のふるさと納税返礼品にも選ばれた。

作っているのは、社会福祉法人「進和学園」の障害者就業支援施設「サンメッセいわ」(平塚市高根)。青いちに間引きされる青摘みみかんを有効利用できないか、という茅ヶ崎市のNPO法人「湘南スタイル」の提案を受け、14年から生産を始めた。年間約3万5千個を販売するヒット商品になった。

出縄守英理事長



社会福祉法人進和学園

湘南みかんぱん



生地もオレンジ色の「みかんぱん」(手前)と、ジュースなどの農産物加工品。平塚市万田

る、湘南産の完熟トマトを使った濃厚なトマトジュースも市のふるさと納税返礼品だ。形の悪さや傷のため捨てられていた規格外トマトを農協や農家から買い取り加工する。

こうした産品を生み出す素地になったのは、大手自動車メーカー・ホンダの部品を長年製造してきたものづくりの力だ。進和学園の創立者の兄がホンダに勤めていた縁で、1974年から取引を始め、45年にわたり仕事ぶりと品質にホンダの信頼を得てきた。

ただ、ホンダの生産拠点の海外移転や2008年のリーマン・ショックなどで部品受注が減少。法人施設を利用する障害者の希望を聞き、食品や工芸品、苗木などをつくり始めた。法人は「本人中心」

を理念に掲げており、「本人のパワーを引き出すのが私たちの仕事」と進和学園の出縄守英理事長(55)は言う。

かつてはほとんどがホンダの仕事だったが、現在の年間約2億6千万円の作業収入は、ホンダからそれ以外が半々だ。自動車部品工場でもある「しんわルネッサンス」は、建物の半分が農産物加工場「湘南工房」になり、障害者が自分に合った仕事に取り組んでいる。

進和学園が目指すのは、働きがいを感じてもらおうことと工賃の増額だという。「地域と連携して、今後も付加価値とエピソードのある商品を作り、作業の種類を増やしていきたい」と出縄理事長は先を見据える。(遠藤雄二)

障害者のパワーが学園の元気

学園を創設した父は自宅で福祉事業を始めたので、幼い頃は障害のある子どもたちと一緒に遊んでいました。地域の理解と協力があったからこそで来ることができました。(障害者) 本人のパワーが学園の元気。余暇を含め、みなさんがやりたいことを実現するため、道しるべをつくっていききたいと思います。

社会福祉法人進和学園 1958年、障害のある子どももの施設としてスタート。現在は大人を中心に就労や生活を支援する12の障害者施設と3保育園を平塚市内で運営。利用する障害者は約500人、職員は保育園を含め375人。本部は平塚市万田。☎0463・32・5325